飯高町（ひだかちょう）

重文指定の瑞花院本堂

古代の当地は「子部（こべ）の里」と呼ばれ、桜井市の三輪山で「雷を捕らえた」という雄略天皇の側近・小子部（ちいさこべ）のスガルも、当地に住んでいたと伝えられます。そして、この「小子部命」を祭る子部神社（こべ）と小子部神社（ここべ）が、字西垣内にそれぞれ鎮座して町の古い歴史を語り伝えています。

古代から地名・飯高が推測される記録は、天平宝字二（七五八）年・弘仁二（八一一）年などの古文書に見えます。しかし、確たる地名としての初登場が貞和三（一三四七）年の「春日大社文書」で、ここに南都・興福寺関係領地「飯高」とあるのが初見となっています。

中世に入って当地を一時支配したのが地侍・飯高氏です。この飯高氏が応仁の乱で没落したあと、南都・興福寺などの代理人支配を経て江戸時代を迎えます。

江戸時代から明治時代まで飯高村と呼ばれた当地が明治二二年に平野村の大字となり、昭和三一年に田原本町大字になっあと同三二年に橿原市に編入され、同年八月に飯高町が生まれました。ちなみに、子部神社に隣接する浄土宗・瑞花院の本堂は、明治四〇年から重要文化財に指定されています。